歯科コラム Dental column

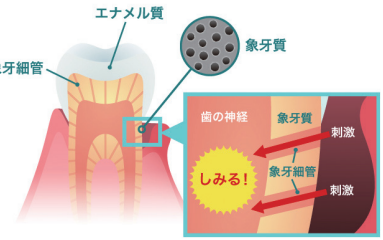
Vol. 20

知覚過敏

公益社団法人茨城県歯科医師会　広報委員会
小松栄一　小野道範

「歯の知覚過敏」は、最近よくテレビなどで耳にし、ご存じの方も多いと思いますが、専門的には「象牙質知覚過敏症」と呼ばれ、むし歯ではないのに、冷たい物がしみる、甘い物や酸味の物がしみる、歯ブラシを当てると痛い、などの症状があります。

歯は外からの刺激から守るためのエナメル質、その内側の象牙質、さらに内側の歯髄（いわゆる神経）でできています。象牙質と歯髄は象牙細管という無数にある細い管で繋がっているため、象牙質に機械的刺激や、冷熱刺激が加わると、その刺激は内部の歯髄に伝達され痛みを感じます。つまり、象牙質は痛みを感じます。何らかの原因でエナメル質が無くなって象牙細管が露出し、そこに刺激が加わった時に「知覚過敏」がおこります。



■どんな時におきるのか、その原因は？

1、歯肉の退縮　加齢や歯周病の進行、間違った歯磨きなどで歯肉が下がってくると、歯根部分にはもともとエナメル質が無いので、象牙質が露出し痛みを生じます。

2、歯が割れる　硬いものを食べたり歯軋りや食い縛りなど歯に強い力がかかることで、歯の表面が微小に割れたり欠けたりして象牙質が露出し症状が出ます。

3、歯の磨耗、咬耗　加齢により磨り減ってエナメル質が無くなったり、歯磨きの力が強かったり、歯磨き粉の研磨剤で歯を削ったりした場合に象牙質が露出し症状が出ます。

4、酸によって歯が溶ける　酸性の食品を長期に習慣的に摂取した場合などにエナメル質が溶かされて象牙質が露出し、更に象牙質が酸で溶かされて症状が出ます。

5、歯科治療の後　歯周病の治療で歯石を取った後、ホワイトニング治療の後などに一時的に知覚過敏様の症状が出ることもあります。

■その治療法は？

軽度の場合は、正しい歯磨きを行うことです。歯垢をしっかり除去することで歯の再石灰化が起こり象牙細管の封鎖が期待できます。しかし、あまり強い歯磨きでは、歯肉が退縮したり、歯根を削ってしまうので注意しましょう。中程度の場合は、歯科医院で専用の薬剤を塗布したり、歯と同じ色の詰め物をして刺激を遮断します。重度で痛みが取れないときは、歯の神経を取る治療が必要な場合もあります。

前述のように「知覚過敏」は様々な原因で起こりますが、歯がしみて痛むのは「知覚過敏」だけではありません。見えない隠れた部分のむし歯が原因であることも多いです。しみるサインが出たら、早めにかかりつけ歯科医院に相談しましょう。

●次回掲載予定　5月18日（月）

茨城新聞2015/02/18版